



# 面接探偵



川崎ゆきお

これは花田虎次郎、通称便所バエ。私立探偵が登場するが探偵談ではない。コンビニで菓子パンを三つ。唐揚げを四つとコロッケを食べた。食べ過ぎた。満腹感は満足感でもあり、歩く姿にも余裕がある。場所はビジネス街。目的とするビルの前で、花田はゲップをする。

そこは面接会場だった。

パイプ椅子に座る花田。ただ、足は開き、深座りだ。腹を圧迫したくないのだろう。面接官は、その異様さに驚いた。花田はリクルートスーツを着ているのだが、上着のグレーより、下のグレーの方が薄く、しかも生地も違うようだ。同じだったとしても、テカリ方が違う。汗と汚れでつるつるになっているのだ。

面接官は花田の落ち着きが気になった。椅子にしっかりと落ち着いている。リラックスしているのだ。

「あなた、プレッシャーはないのですか」

「たまらず、聞いてみた。」

「はい」

「どうしてですか」

「分かっていますから」

「え、何がですか？」

「ああ、落ちることを」

「はあ」

「結果が分かっているので、安心なんです。だから、プレッシャーもありません」

「採用するかどうかはこちらで決めます」

「そんなの、決まってるくせに」

花田は面接官三人を、まるで重役のような目でなめ回した。

「ウェブの経験は」

「ありません。素人可となっていたので」

「プログラミングは」

「それも、素人可となっていました」

「ないのですね」

「はい」

花田は腹がズツナイのか、ひもを緩める。ビジネススーツズボンはなく、ゴムパンのようだ。だから、結び直すという方が正しい。

「結果は一週間以内に」

「もう、出てるくせに」

「いえいえ」

「次、回りますから、早く知らせてください」

「不採用の場合、連絡はしません。一週間以内にこちらから電話がなければ、まあ、そういういことで、お願いします」

「じゃ、その一週間、どうして過ごすのかな。他へ、行ってもいいでしょ」

「ご随意に」

翌日電話があった。

問い合わせたいことがあるので、もう一度面談したいと。

花田を気に入った面接官は営業部長だった。

花田と営業部長は誰も来ないようなシャッター街のオフィスビル地下飲食街にある喫茶店で合った」

「事件ですか」

花田は真っ先にそう聞いた。一応探偵なので。

「いえ、あなたが事件なんです」

「ああ、僕が犯人。なるほどなるほど。でもそれは探偵小説としては禁じ手なんだなあ。探偵が犯人は、だめですよ」

「あなたの、そのリラックスした感じが欲しい。プレッシャーのなさが欲しい」

営業部長が語り出した。

「売ろうとしているのが、見えてしまいます。それで客が引く。ここが営業のターミナル、ハブなんです」

「ハブ」

「港です」

「埴生の港ですね」

営業部長は、何かよく分からないので、無視する。

「あなたのような人を突っ込ますとおもしろいのではないかと、私は思うのです」

「でも僕はウェブのことは分かりません。ホームページを作る会社でしょ」

「そんなもの何一つ知らなくてもいいのです」

「何か、悪いことを、企んでませんか」

「あなたなら出来る」

「何が」

「ダメージ」

「はあ？」

「営業の新人が育たない。やめていきます。ダメージです。ダメージを受けて。あなたなら、いけそうです。タフそうなので」

「それはどうせだめだと思うから出来るのですよ」

「それです。それ。その方法、それは、新手です。あなたを見て、それを思いつきました。最初から諦めているのなら、何のプレッシャーもない。そうですね。我が社に面接に来たときも」

「はい、だから、もう僕は安心で安心で」

「どうです。私の一存で、決められます。募集を申し出たのは私ですから。私に決定権があります」

「ぶ、部長さん。それがパラドックスなんだなあ」

「パラドックス。それはまた難しい単語を」

「僕は安心して落ちたのですよ。採用されると狂います」

「しかし、就活の目的は採用されることにあるのでは」

「見学です」

「け、見学」

営業部長は頭の中のハブ乗り場をうろうろした。見学なら、遊覧かと。

「では、その」

「だから、最初から入社する気はありません」

「では、ここからは、一個人として聞かせてください」

「はい、どうぞ」

「あなたはどなたなのですか」

内閣官房室と、花田は答えたかったが、嘘は言えない。ただの素人探偵なので。

「笑いませんか」

「笑いません。真剣です」

「た」

「タニシですか。そんなわけがない。タニシじゃない」

部長は観念を涎のように垂らしたようだ。

「探偵です」

部長は二秒後に爆笑した。

話し合いは、そこで終わった。

世の中には噛み合わないことがある。

